

「日本人の文字文化」(8・4・20)

河崎 定夫(昭24・文丙)

ただ今ご紹介いただきました河崎でございます。今日お話し致しますことが、果たして皆様のお気に入りですか、まことに気がかりです。ともあれ、日本の文字は、他国、特に非漢字系の国の人からは、まことに難しい、特異なものと思われるしております。

ところで、今日の話題に入ります前に、広く世界の文字を見ておきたいと思うのです。但し、既に消滅してしまった文字や全くローカルな文字は外し、各国の公用語を写す文字だけを考えることにしたいと思います。

世界には独立国が百九十あり、公用語も、恐らく百二十はあると思います。ところが、公用語を写す文字と言いますと、全部で二十八種類を数えるに過ぎません。そして、字を書く方向と母音の書き表し方とに着目して、四つに大別するのが適当だと、私は考えます。

まず縦書きの伝統を持つ文字が四種類見られます。漢字・仮名・ハングル・モンゴル文字がそ

れであります。

次に、右から左へ横に書くグループ三種類があります。アラビア文字がその代表でありまして、原則として、母音を書き表さないという特徴が認められます。

さらに、左から右へ横書きするグループが続くのですが、その中で、母音符号という物を使用するグループが注目されます。そこには十六種類の文字が含まれますが、その大部分をインドと東南アジアの民族文字が占めております。

最後に、左から右へ横書きすると同時に、それぞれの母音をはっきりと書き表すタイプの五種類の文字があります。その代表がラテン文字です。これをアルファベットと呼ぶ人がありますが、アルファベットはどの文字にもあつて、文字名にはなりませんし、ローマ字と言えば、中身が日本語というニュアンスを伴います。結局、文字名としてはラテン文字が適当だと思つたのです。

これら二十八種類の文字のうち、アジアに多数存在する民族文字は、次第に消滅する方向へ向かつており、それに替わつてラテン文字が勢力を伸ばしつつあるのが現状です。すなわち、十九世紀にベトナムで民族文字が廃され、二十世紀にトルコがアラビア文字を廃した際には、いずれもラテン文字への切り替えが行われました。

このように歴史的に見て、他の文字からラテン文字へ変わるケースは認められるものの、その逆の例が見当たらないことや、学術関係の書物では、他の文字で書かれた単語には、必ずラテン

文字に書き直したものを添える習わしのあることによって、ラテン文字の優位は動かぬところとなつていきます。

①三種四様の文字遣い

このように見て来た後で、日本の文字の書かれたものを見ますと、そこには、漢字あり、仮名あり、ラテン文字まで入っているという、(J Rとか、V Sなどがラテン文字で表記されるようになったことの外に、コマーシャルなどでは、外来語がラテン文字の綴りのまま出て来ること)も決して珍しいことではないという)状況が見られるのです。

つまり、日本語では、一つの文章の中に三種類の文字が交じって出て来ることが認められるのですが、そんな風に、一文中に複数の文字が混在する例は、世界広しと言えども、日本・韓国・モルディヴの三国をおいて外には見掛けないところがあります。

また、漢字が、世界でも特殊な文字と見なされるのは、縦書きであること、分ち書きをしないうことの外に、一字一字が意味を持つ物であるということが大きいのだと思われれます。但し、神秘的とまで言われますと、いささか驚かざるを得ません。

さらにそれに加えて、書道という芸術の存在することも、日本の文字文化の特徴に数え挙げられるのではないでしょうか。なるほど、ラテン文字の世界にもカリグラフィ(きれいな字を書く

こと」という言葉がありますし、ペンマンシップと称する、書道に類するもののあることは事実です。しかしそれは、美しく、且つ形の整った字を書き連ねることであり、技巧の追求を事とするものであります。

我々の書道のように、単に文字の形を整え、筆勢を重んじるばかりではなく、「にじみ」や「かすれ」を鑑賞したり、字配りや余白を問題にし、形に表されない線のつながりや、書く人の人柄までをも味わうという世界とは異質の物であります。

この、東西の書道の違いを例えて言いますと、自然の樹木を愛（め）で、枝ぶりを觀賞する日本の庭と、整然たる幾何学模様を完成させ、人工のエッセンスを味わわせる、西洋の庭園との差に類するものではないかと思われるのです。

また、先程、文字の種類を数えるのに、仮名を一種類と勘定しましたが、一般には、平仮名と片仮名とを二種類と数える人が多いようです。それは、この両者には、生い立ちから言っても、使われる場面から見ても、異なる物があるからであります。

片仮名は、もと、学僧が師の講話のメモをテキストの行間（ぎょうかん）に書き込むために、それも速く書く必要から、漢字の一部を切り取って作った省略形に由来し、「片」は不完全を意味するものであったのに対して、平仮名の方は、万葉仮名の草書体から出た「草仮名」という物を、さらに崩した形に由来する物であります。

そして、後者が専ら和歌や消息（手紙文）の世界に用いられ、書き手も多くは女流であったために、「女手」と言われたのに対して、前者は男の世界に属し、漢文脈の中に用いられ、漢字片仮名交じり文が正式とされて来たのであります。したがって片仮名は、かつては正式の文の文字であり、小学校でも、まず片仮名から教える定めでありました。

現在のように、漢字平仮名交じり文が正式となつてから、片仮名は、外来語・動植物名・擬音語など、特別の用途に限られるようになったのです。あるいは、作者が特別の意図をもって使用する場面（通常は平仮名で書くところを、「ダメ」と片仮名書きする時など）に用いられたりして、まるで、欧米の書式に見られるイタリック（斜体）のような使われ方が見られるのです。

いずれにしても、両者は使用の場面が截然と分かれていてニュアンスの上でも違いがありますので、それを考慮して言えば、日本では三種の文字が四様に使われていると言えるのであります。

② 漢字の読み方の複雑さ

日本では漢字の読み方に、音と訓の区別のあることは常識となっています。

ところが、漢字の本場である中国では、一字一音が原則であります。もともと、時代が異なったり、場所が変わったり致しますと、発音に変化の見られることは事実であります。時代と場所を指定して、「唐代の長安音」とか、「宋代の開封音」などと言いますと、大抵の字が一字一音

になるのであります。

このことは朝鮮半島や昔のベトナムでも変わりません。両国とも、元々、我が国の訓読に相当する物が無かったのです。

さて、日本での漢字の読み方に就いて申しますと、音読だけを取り上げてみても、呉音・漢音・唐音のような、読み方の違いが見られるのでありまして、それらは一語一語、その読み方を覚えるより外に無いのであります。

今、「行」の字を例にして申しますと、行儀とか改行のように「ギョウ」と読まれるのを呉音と言ひ、行動・進行のように「コウ」と読むのが漢音であり、行脚のように「アン」となるのは唐音と呼ばれます。

このうち、呉音は、呉、すなわち楊子江下流地方の、六朝時代（三―六世紀）の発音を表し、それが古い時代に、朝鮮半島經由で日本へもたらされた物であります。日本の漢字音の中の最古層でありまして、すっかり日本語に溶け込んでしまったような語、人間（ニンゲン）・絵（エ）などがそれであります。また、極楽（ゴクラク）・寿命（ジュミョウ）など、仏教関係の語に数多く見られるようです。

一方、漢音と称する物は、遣唐使一行が持ち帰った、唐代の長安の発音であります。我が国では、従来、和漢・漢字と、「漢」で中国を言い表して来ましたので、唐代の発音に対しても、漢

胡	權	元	兄敬	惠	京經	金	極	間	外	会・絵	火	下	遠	
ゴ	ゴン	ガン	キョウ	エ	キョウ	コン	ゴク	ケン	ゲ	エ		ゲ	オン	(呉音)
コ	ケン	ゲン	ケイ	ケイ	ケイ	キン	キョク	カン	ガイ	カイ	カ	カ	エン	(漢音)
ウ					キン				ウイ		コ			(唐音)

暖	内	然	生省	聖正	西	成・請	人・仁	上	女	日	自	弘	行	
	ナイ	ネン	シヨウ	サイ	ジョウ	ニン	ジョウ	ニョ	ニチ	ジ	グ	ギョウ		(呉音)
ダン	ダイ	ゼン	セイ	セイ	セイ	ジン	シヨウ	ジョ	ジツ	シ	コウ	コウ		(漢音)
ノン					シン							アン		(唐音)

靈	力	流	木	謀	武無	瓶	兵	白	反	弟第	定	男	
リョウ	リョク	ル	モク	ム	ム		ヒョウ	ビヤク	ホン	ダイ	ジョウ	ナン	
レイ	リキ	リュウ	ボク	ボウ	ブ	ヘイ	ヘイ	ハク	ハン	テイ	テイ	ダン	
						ビン							

音という名が当てられたものと思われれます。

日本では、それぞれの漢字の標準的な発音が漢音であることが多いのですが、到来の経路は、遣唐使と共に中国へ渡った官吏・学者・僧侶が持ち帰った文物の呼び名に由来するものでありまして、当時としては新しい発音であると共に、官や学の匂いの濃いものであったようです。

一例を挙げれば、上下（ジョウゲ）という呉音読みが民間で行われていた時（現在もそう読まれますが）、漢籍の世界では、ショウカと読み習わしていましたが、仏教関係の経典（キョウテン）に対して、儒教関係では経典（ケイテン）と読まれてきました。

また、唐音と言いますのは、鎌倉・室町から江戸時代にかけて中国へ渡った僧侶や貿易を通して持ち込まれた文物に伴って入って来た字音である、暖簾（ノレン）・提燈（チヨウチン）などに見られるものでありまして、主として、宋（ソウ）・明（ミン）の発音、まれには清（シン）時代の発音を表しております。

宋や明の発音を、なぜ唐音と呼ぶのかという疑問はもつともありますが、彼の国の国名の中で、我が国では「唐」が最も有名でありまして、漢より新しい時代のもので、唐で代表させる習わしがあったのです。「トウガラシ」や「からくさ」など、唐（トウ・から）で中国を表す例の多いことが、その現れと思われれます。

では、中国において時代と共に変化した漢字の発音が、なぜ我が国では、入って来た時の発音

を維持したのかという疑問が残りますが、正確には分からないものの、日本では、入って来た当時の発音を正しいものとして呼び続ける傾向のあることは否めません。つまり、一旦決まった呼び名が固定するのです。

それと同じことは、明治時代にもたらされた外来語に就いても言えるのでありまして、トロッコとトラックは、元は、どちらも同じ「truck」であります。ところが、持ち込まれた経路が違い、指し示すのが異なる物であつてみれば、日本では別々の語として通用し、字形も（違いのまま）、それぞれに正しいとされるのであります。

また、ヨーロッパでは、他国の王名を自国流に読み変えてしまふのが普通であります。その結果、フランスのルイ十四世がドイツではルドヴィヒ十四世と呼ばれますが、だからと言って、ラシケの世界史を訳す時、そのままルドヴィヒ十四世としたのでは、日本では通用しません。フランス王は、あくまでもルイ十四世でなければなりません。同様に、ジェーン・オヴ・アークはジャンヌダルクと呼び変えねばなりません。

また、同じ「Charles」という綴りであっても、英国王はチャールズ、フランス王はシャルルと読まれます。

この場合、耳から聞いた呼び名が片仮名となつて視覚的に固定し、その際、元の綴りは問題にされないと言つた方がよさそうです。

ところが、このように読み方の固定するものがある一方には、目まぐるしく読み方の変わる例のあることも、ぜひ指摘しておかねばなりません。それは、次のような例に見られるものです。

インドの仏教では、観音の浄土をプタラカと申しました。漢訳の經典には、補陀落（フダラク）として出ております。ところで、栃木県にあつて、現在では男体山として知られる山に、かつて、二荒（フタラ）という名が付けられたのも、このプタラカに由来するものであります。

ところが、「二荒」という字から「ニコウ」という読み方が生じるようになり、さらに、その読み方に対して、「日光」という字が当てられた上、今度はその字から、「ニッコウ」の呼び名が生じたのであります。初めの「フタラ」が次々に変化していつて、「ニッコウ」となってしまうのです。そこには、漢字を自己流に読むことと、発音に勝手な字を当てるといふ、二つの傾向が認められます。

前者は、他人の名前を自己流に読むことにもつながります。その結果、詩人の土井（つちい）晩翠を、「ドイバンスイ」と読む人が跡を断たなくなつて、ついにご本人が訂正をあきらめてしまわれたと聞いております。維新の元勳である木戸孝允（たかよし）の名を口にすると、「キドコウイン」の事ですかと問い返される始末であります。

勝手な当て字の方は、慶事に際して、スルメを「寿留女」と書き、扇子のことを「寿恵廣」と書く、いわゆる吉祥字当ての風習にも見られるところであります。

これを先程の例と併せて申しますと、入って来た言葉の字音が固定する例が一方にあるかと思うと、他方には読み方も字の方もどんどん変わるケースが存在していて、しかも、どちらがどんな場合に現れるかが予測出来ないという複雑な様相を呈するに至っているのであります。

③漢字に対する依存度が大きいこと

我々にはあまり自覚されないことなのですが、漢字への依存度が極めて高いことは、日本の文字文化の特徴と言ってもよいのではないかと思われれます。

ともあれ、日本語に同じ発音の単語の多いことは、耳で聞く場合も、物を書く場合にも、甚だ厄介な、不便を感じさせるところであります。

例えば、「カンシヨウ」と発音する単語として、干渉・鑑賞・観賞・感傷・緩衝・管掌・環礁・痲性・冠省などが挙げられます。また、物を書く時に、「ホシヨウ」を保証（保証人）とするか、保障（社会保障）であるか、補償（損害補償）なのかに迷うのも、よくあることです。

中には、文脈によっても区別のつかない、私立と市立、化学と科学のような例もあります。そんな時、「ワタクシリツ」・「バケガク」などの呼び替えが行われるのは、文字を思い出させる工夫に外なりません。これは、文字が分かれば意味も分かること、あるいは、書き誤れば別語と受け取られかねないという懸念があるからだと思われれます。

そして、そこから、文字が大事という気風が生まれ、同音語の氾濫と相まって、文字への依存を益々助長する結果ともなっております。

例えば、名刺を交換する時、相手のご名字までは読み方を確かめもしますが、下の名前や住所に就いては（目の前にいらっしやっても）お尋ねすることはまれであります。また実際、読み方が分からなくとも、名簿の作成にも手紙を差し出す時にも何の不都合も生じませんから、いきおい読み方のほうは不問に付されることになってしまふのです。

こうして、読み方の分からない他人の名前は、自己流に読まざるを得ないことになり、字さえ分かれればよいとする、先程の風潮がさらに拡大されます。

逆に、漢字が分かるといふことは、一字一字の意味を積み重ねることによって、大体的意味がつかめることにもなります。そんな所から、さして重要でない場合でも、漢字を知りたがり、それが分かって初めて気が済むという傾向が、日本人には見られるのであります。

また、漢字のことを本字と言ひ、仮名には「仮」の字が当てられていることから、漢字を大事にする傾向のあつたことが知られますが、そのせいか、昔の人の文章には、仮令（たとえ）とか、許（ばか）りなどと、一寸（ちよつと）した言葉にも漢字が顔を出します。

しかし、こうして漢字を多用し、また、その漢字が表意文字であるところから、日本人はかなりの専門語でも、その意味がある程度つかめているのであります。

例えば、英語の anthropology という語は相当難しい専門語でありまして、一般人には分かり難いものなのですが、「人類学」という訳語によって、日本人には容易に見当のつく言葉になっています。

また、ハイドロフォビア（恐水病）とハイドロゲン（水素）とから、ハイドロが水を意味することを理解するのは、英語では難しいことに属しますが、日本人にとつて、両語に含まれる水（スイ）が、水（みず）を意味することを理解するのは何でもないことです。このことを欧米の人に説明すると、ひどく感心されるのであります。

識者は次のように言います。「日本が中国の隣に位置していたために、我々の先祖は先進文化である漢字を受け入れざるを得なかったのであるが、それは、必ずしも日本語の表記にピッタリのものではなかった。それでも、長年それに慣れ親しんで来たのである。そうして明治時代を迎え、西洋文明に接した時、「社会」・「文化」・「経済」などと、漢字を組み合わせた熟語を作つて対応しているうちに、耳で聞いただけでは意味の分からない言葉の氾濫を来し、その結果、漢字への依存度を増すことになつてしまつたのである」と。

④ いろは歌とその類（たぐ）い

仮名のすべての字を一度ずつ使って、意味のある作品を作ることにかけては、昔から日本人は

まことに熱心であったと言えるようです。また、それは日本の文字文化の特徴に数えてもよいと思われず。

いろんな物が出来ている中で、ここでは三つだけ披露することに致しましょう。

(a) いろは歌

いろはにほへと ちりぬるを (色は匂えど 散りぬるを)

わかよたれそ つねならむ (我が世誰ぞ 常ならむ)

うみのおくやま けふこえて (有為の奥山 今日越えて)

あさきゆめみし ゑひもせず (浅き夢見じ 酔いもせず)

これは仏教の涅槃経(ねはんぎょう)の偈(げ)の漢詩形式になっているもの(諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為楽)の和訳であります。全部で四十七字の作品です。

(b) 国音(こくいん)の歌

とりなくこゑす ゆめさませ (鶏鳴く声す 夢覚ませ)

みよあけわたる ひんかしを (見よ明け渡る 東を)

そらいろはえて おきつへに (空色映えて 沖つ辺に)

ほふねむれぬぬ もやのうち (帆船群れいぬ 霧のうち)

これは、明治三八年、萬(よろず)朝報紙の懸賞入選作で、作者は埼玉県の坂本百次郎氏です。

「ん」の入った四十八字の作品です。

(c) 新仮名遣いで、四十六字の例

はる わかめいろよくもえ (春 若芽色よく萌え)

なつ ぬまへてうおをとる (夏 沼辺で魚を捕り)

あき むしのねすんたみそら (秋 虫の音澄んだ御空)

ふゆ ほちにこけやせさひれ (冬 墓地に苔瘦せ寂れ)

これは作者が誰だか分かりません。

次に、参考までに英語の例もお目にかきましょう。

M R J O C K T V Q U I Z P H . D . B A G S F E W L Y N X .

(テレビ・クイズの博士、ジョック氏は、袋に山猫を少ししか入れない。)

クレメント・ウツズの作です。P H . D . は「ドクター・オヴ・フィロゾフィー」と読み、博士のことです。このような略語を使用することによって、ようやく得られた作品です。

漢字は字数が多いので、全部の字を使うことは到底無理なこと、恐らく不可能だろうと思われるのですが、そんな中であって、「千字文」は、千字だけではありますが、四字を一句とした二百五十句が、韻文の形をなす、素晴らしい作品であります。

これに就いては、次のようなエピソードが伝えられております。

中国の南北朝時代の、南朝の梁（六世紀）の武帝は、ある時、王子たちに文字を習わせようとして、王羲之の真跡の中から、重複しないように、千字を集め、それを一字一枚の形にしたものを周興嗣に示し、これを一字も重複させずに全部使って編集するように命じたそうです。すると、周興嗣は一夜でそれを完成させたのですが、翌朝、頭髪が真っ白になったと言われております。

この話の真偽はともかくとして、千字文には、必要と思われる字がほとんど入っている上に、覚え易いようにと、四字ずつ二百五十句が韻を踏んで並べられているという、まことに驚嘆すべき出来栄えのものであります。どうやら時間となったようですので、これで終わらせていただきます。

（財団法人日本習字教育財団）